



地域経済 活性化の道

《地方の時代》を実現する

山崎充 著

有斐閣選

82330

山崎 充著

地域経済活性化の道



太外701438470



有斐閣
選書

著者紹介

山 崎 充 (やまざき みつる)

1934年 静岡県富士市生れ

1956年 東京経済大学経済学部卒業

現 在 専修大学北海道短期大学教授

著 書 『日本の地場産業』(ダイヤモンド社)

『地場産業都市構想』(日本経済評論社)

『異色No.1 企業への道』(ダイヤモンド社)

『闘え! 中小企業』(リサーチ出版)

『縄のれんの経済学』(日本経済評論社)

『地域産業の読み方』(PHP出版)

他

地域経済活性化の道 (有斐閣選書)

昭和59年11月30日 初版第1刷発行

定価 1,200 円



著 者 山 崎 充
発 行 者 江 草 忠 敬
発 行 所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町 2 ~ 17

電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 理想社印刷・製本 明泉堂製本

© 1984, 山崎充. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-02433-2

はしがき

近年、地域経済の活性化を図るには、どういうことをするとよいのか、といったことに関しての一般の関心が非常に高まってきているように思う。

最初の頃は、こうした関心ももっぱら地方自治体のなかの深い問題意識を持っている職員とか、地域の指導的立場にある人たちの間にみられる程度であった。しかし、最近では一般住民のなかにもそうした問題に深い関心を持つ人が多くなったといつてよいようだ。というのも、最近全国各地で明日の地域経済を考えるシンポジウムがさかんに開催されているし、それに関心を寄せる住民層が以前に比べて広がっているようにみえるからである。筆者も、その種のシンポジウムにパネラーとして、あるいはコーディネーターとして参加する機会が最近多いが、どの会場も参加者が多いし、地域の各界各階層の人たちが参加している。これは、きわめて喜ばしいことであるといつてよいであろう。

地域経済の活性化に多大の関心が寄せられるのも、しごく当然のことであるといつてよいだろう。なぜならば、最近定住志向の高まりを背景に、Ｕターン、Ｊターン希望者が増大する傾向にあるが、差し当たりこれらの人たちに提供すべき働く場が地域では不足がちであるからだ。雇用機会の

増大が地域経済では、緊急の課題となっているが、このためには地域経済の活性化を図っていくことが必要である。

地域において雇用機会の増大していく方法には、三つのものがある。

一つは、地域産業の再生であり、二番目は、新しい地域産業の創出であり、三つ目は企業誘致である。相変わらず企業誘致に奔走しているところもあるが、地域経済活性化の王道は地域産業の再生であり、新しい地域産業の創出であるといつてよい。このことは、誘致した企業がうまくいっている間はよいが、いったんつまずくと誘致した企業がいかに地域のお荷物になるかということ、ここ二十年ぐらいの間に、いやというほど知らされている。

もとより企業誘致が不必要であるというつもりは少しもない。地域経済の活性化にとって誘致企業が雇用機会の創出、技術の移転、地域の所得水準の上昇などを通じて大いに寄与していることは否定できない。したがって企業誘致も地域経済活性化の有力な手段として活用すべきである。

しかし、これだけに頼っているのではない。やはり基本は、地域に土着している地域産業を時代に適応した形に再生し、これを大いに育てていくことに置かなければならない。地域産業でみるべきものがなければ、新しく地場産業を起こしていくことをやらなければならない。地域経済活性化の主役は、あくまでも地域産業でなければならないのである。

ここで地域産業といっているのは、本社を地域に置き、経営者が地域の住民の一員になりきって

いる土着の中小企業群のことをいう。もう少し具体的にいえば、①地域の事業所や住民を対象にモノやサービスを生産、販売している卸・小売業、サービス業、製造・小売業など、②もっぱら特産品の消費財を特定の地域に産地を形成して生産し、それを全国や世界に販売している輪島の漆器や燕の金属洋食器などの地場産業、③産地は形成していないが、技術、原材料などの生産資源や市場などの面で地域に根ざしている独立企業などがそれである。

ところで、地域産業を主役とした地域経済の活性化を図っていくことは、けっして容易なことではない。これに取り組んでいる人たちは、なかなか苦勞を重ねている。しかし、これは「地方の時代」を本物にするためには、地域経済が挑戦していかなければならない重要な課題であるといえよう。

本書は、この地域経済の重要な課題である「地域経済活性化の道」を摸索したものである。もとよりこれがキメ手だといった「地域経済活性化の道」があるわけではない。本来地域が多様である限り、その道も地域によって異なっているとみてよい。本書がそれぞれの地域で地域経済の活性化を図ろうとしている人たちになんらかの役に立てば、こんなに幸せなことはない。

本書は、ここ数年間に筆者がすで雑誌に発表した論文を中心に構成したものである。これらの論文を「地域経済活性化の道」を摸索するという問題意識にそって再構成し、当然、加筆・修正もしてここにまとめたのが本書である。なお、第2章だけは新たに書いたものである。この点が全部を

書き下ろしたものと違い、若干重複するところもないではないが、かなり書き下ろしに近いぐらゐに構成し、手を加えてあるつもりである。

この機会を借りて、いろいろな機会に筆者の調査にご協力いただいた主に地域の人たちに厚くお礼を申し上げるとともに、今後もより一層のご支援、ご協力をお願い申し上げる次第である。

正直一冊の本にまとめるということは、書き下ろしでなくてもなかなか容易なことではない。約束しながら期日までに脱稿しない筆者がどうか一冊の本をここに出せるのは、有斐閣鹿島則雄氏の力によるものであることを一言申し述べておきたい。鹿島氏に大変お世話になったことに深くお礼申し上げる次第である。

昭和五九年十月十日

山崎 充

目次

はしがき

第1章 地域への接近の視点

1 地域とは何か

2 必要な地域の多様性の重視

3 必要な地域産業の再評価

4 必要な地域経済の文化性向上

5 地域経済の活性化とは何か

第2章 地域の多様性

——実態とその評価——

1 2 6 9 12 14 19

1 日本の地域は全国画一的か

20

2 地域の多様性を示す事実

24

地域差の目立つ所得水準 地域で異なる好む酒の種類 大いに
異なる県民性

3 地域の多様性を生かす時代

35

第3章 地域社会に果たす中小企業の役割

1 技術革新の担い手

42

企業城下町と地場産業の町 行動様式の異なる大企業と中小企業

2 革新を生む土壌の形成

46

ソフトの経営資源の蓄積 中小企業は人材を教育する

3 中小企業経営者への期待

54

第4章 地場産業再生の視点

1 地域経済の中の地場産業

60

なぜ地場産業を重視するか 地場産業の全国分布

2	地場産業を取り巻く環境変化	66
	需要構造の変化 供給の側面の変化 技術革新の波が押し寄せ る 競争の側面の変化 産地の二極分化がすすむ	
3	地場産業再生の基本的方向	77
	必要なイメージ的目標の設定 どのような戦略を展開すればよい か 産地企業は何をなすべきか 小零細企業もソフトの経営資 源の蓄積を	
第5章	新しい地場産業の創造	89
1	新しい地場産業創造の動き	90
2	新しい地場産業創造の方法	93
3	観光みやげ物としての地場産品の開発	96
	地場産品は本物づくりが大切 地場産品の開発はどうしてやるか 地場産品の開発に成功するには 地場産業が観光資源になる時代	
第6章	地域産業の振興の方策	109
1	地域産業に求められる革新	110

2	地域に台頭する革新型中小企業	112
	全国に多数台頭してきている自前企業 ベーション	地場産業に見られるイノ
3	中堅・中小企業の革新の方向	121
第7章	地域経済における観光開発	127
1	観光開発の経済効果とは	128
2	どういふ地域が観光開発に熱心か 後進地の方が観光開発に熱い	129
	なんでも観光資源になる時代	
3	観光開発は地域産業にプラスか 観光は新しい地場産業の市場に格好	132
	観光に悪乗りは危険	
4	観光開発の経済効果を生かすために 観光開発は多産業に波及	136
	高年齢者の雇用機会の開発効果 活かされる未利用資源	
	観光客は情報を持つてくる 住民の生活は 大切に	

5	創造の喜びを味わう場づくり	143
第8章	地方自治体の指導機関の	

産業振興に果たす役割

1	指導機関の果たした役割	148
2	指導機関のジレンマ	151
	指導したいところは乗ってこない	
	「診断書」が生かされない	
3	地域振興の課題は何か	154
	中小企業の「苗床機能」の強化	
	地域文化の振興	
	商店街再開	
4	指導機関の今後の役割は何か	164
	革新をやりやすい条件の整備	
	INS時代への適応	
第9章	今求められる地域産業政策	169
1	必要になった地域産業政策	170

「地方の時代」はこれからが本番 整う地域定住の条件

2

構造不況業種をどう救うか

地域経済に多い構造不況業種 構造不況業種の救済は難しい

地域産業政策でも競争政策の活用が大切

3

地域産業政策の具体例

山梨県クリスタルバレー構想とは 四つの方策の提言に注目

輪島市の漆の里建設構想とは 地場産業都市の条件 シンボル

ゾーンの事業内容

4

地域産業政策の基本的方向

地域産業政策の定石とは 企業誘致をどう評価するか 産業政

策の総合化 文化政策も必要な時代 産業政策のソフト化をは

かろう 地方自治体の人づくりがキメ手

第1章

地域への接近の視点



『農村らしい生活と風物詩を大切にしながら農家所得の向上を……』
(北海道池田町観光協会『旅のカタログIKEDA』より)。東京・新宿にも直営レストランをもつ池田町・十勝ワイン

1 地域とは何か

近年、地域経済や地域産業の活性化を図っていかうという気運が非常に盛り上がってきている。このため、地域に対する関心がとみに高まってきているといつてよいようだ。

最近新聞紙上をはじめマスコミを賑わしているのがテクノポリスと一村一品運動であろう。テクノポリスは、先端技術産業をテコとして地域経済の活性化を図っていかうというものであるのに対して、一村一品運動は、地域に根ざす原材料資源や知恵を活かして何か新しい地域産業を起こしていこうというものである。この二つの地域経済活性化政策が刺激となつていちだんと地域経済活性化の気運が盛り上がっているように思われる。

もっとも最近の地域経済の活性化を図ろうという気運には、一種の「流行」といった臭が感じられないわけでもない。このところ下火になつたが、ひと頃のテクノポリス・フィーバーや最近の一村一品運動にあやかりたいとする人たちの大分県詣をみると、そうした感がしないでもない。

しかし、地域経済の活性化を図ろうとする気運は、一部には浮ついた面がないわけではないが、今大きな潮流となつて日本列島をその渦中に巻き込んでいる。それは、かなりしっかりしたもので

あり、日本列島を大きく変えようとする勢いを持っているものである。

この潮流にじょうずに乗って主体的に地域経済の活性化を図った地域と、この潮流をただ傍観しているにとどまった地域とでは、将来大きな差がつくことは避けられそうにもない。各地域は、それぞれの地域の実情に即した経済活性化に取り組んでいくことが期待されるのである。

このためには、地域はいつたい何をしなければならぬのか。このことを考えていくのが本書の主たる狙いであるが、本章ではまずよく使われる「地域」とは何かということに答えることを手掛かりにこの地域経済の活性化に対する基本的な視点を提示することにしよう。

もっとも、ここでは「地域とは何か」という定義的なことについては立ち入った議論はしないことにする。というのも、地域という地理的空間を規定する概念としてよく引き合いにだされる等質性とか、結節性を持ちだしてくると、たしかに観念的、理念的には地域を理解できても、いざ現実の地域にこれを当てはめてみると、かえって議論が混乱してくるからである。もともと地域という概念は、明確な定義をくだすことができるほど単純なものではないのである。

そこで、ここでは地域という場合、一般に使われているように市町村単位や都道府県単位、さらには圏単位の「行政区域」というものを念頭において、地域の問題を考えることにしよう。実は、差し当たり、地域をこのように「行政区域」とみても、それは等質性とか、結節性といった尺度でもって定義した理念型の地域概念とそれほど大きくは変わらないのである。

このことは、地域の定義としてよく使われる等質性と結節性という概念の意味内容を明らかにすれば、少しは理解できるだろう。そこで、ここでは深く立ち入ることはしないが、簡単にこの二つの概念の意味内容を説明しておこう。

まず等質性であるが、これはある広がりをもった土地のなかでどこをとってみても、同じような性質をもっているのが「地域」であるということである。もう少し具体的にいえば、自然的条件が同じであり、しかもそこに住む人たちが共通の価値感を持ち、同一の生活慣習に従い、かつ共に生活する一体感と集合体への帰属意識を共にもっている地理的空間というのが、等質性という尺度からみた地域であるということになる。

これは、「生活圏」とほぼ近似の概念である。市町村という「行政区域」は、一種の生活圏であるともみることができるので、市町村を地域とみてもいっこうにかまわないということになる。

次に結節性であるが、この概念は「地域」を構成しているどの部分も、この「地域」のなかのどこかほかの部分と密接な連携をもっていれば、それを「地域」と呼ぼうというものである。もう少し具体的にいえば、たとえば一つの県をとった場合、県庁所在都市とそのほかの市町村とは行政の面で連携を保っていると同時に、生活の面でもそのほかの市町村に住んでいる人たちが月に数回、買物や音楽会、美術館に出かけてくるといいう形で交流をもっている。こういう場合には、等質性に欠けても、結節性を持っているので「地域」としてみなそうというのである。